

創造都市 を旅する

想像力から生まれる
建築の創造力

新たなビッグプロジェクトが相次ぐ日本の建設業界。ハイスペックな構造物、生産性に優れた高度な建造物が次々と提示されている。しかし一方で、日本の建築はかつての想像力を失っていないか。新たな造形に挑む創造力は健在か。

建築史からサブカルチャーまで、幅広いフィールドで縦横に論評する、東北大学大学院教授・五十嵐太郎氏に、建築の想像力復権に向け語っていただいた。



『AKIRA』第1巻 P126より、旧市街地をオートバイで疾走する金田や鉄雄たち
©大友克洋／マッシュルーム／講談社

や、東京の高層ビル群など既存のイメージをうまく融合させています。その都市景観が超能力によって瓦解する。押し潰されるコンクリートの描写などが建造物や都市の存在感を強調する。強大な見えない力、超能力によって、めり込むよう



渋谷PARCO建て替え工事の現場を飾る『AKIRA』をモチーフとしたアート作品
©MASH・ROOM / KODANSHA ©Kosuke Kawamura

『AKIRA』が描いた都市像

およそ三〇余年前に一世を風靡した漫画『AKIRA』。舞台となった二〇一九年の近未来の東京に、まさしく現実が追いついたことで、再び注目を集めている。この作品が色褪せないのはなぜだろう。未来を描く創造力を刺激する豊潤な想像力の魅力を探る。



五十嵐太郎 Taro Igarashi

建築史・建築批評家 東北大学大学院工学研究科 教授
1967年 フランス・パリ生まれ
1990年 東京大学工学部建築学科卒業
1992年 東京大学大学院修士課程修了、博士(工学)
近著に『ぼくらが夢見た未来都市』(共著、PHP新書)、『空想 皇居美術館』(共編著、朝日新聞出版)、『現代日本建築家列伝』(河出書房新社)、『被災地を歩きながら考えたこと』(みすず書房)、『3.11/After-記憶と再生へのプロセス』(監修・LIXIL出版)など。

Creative Cities

建築の創造力を取り戻す

今春、ある建築系雑誌が「平成の一〇大建築」という特集を組んだ。著名人二〇名が選んだ二〇の作品のなかに、東京の建築物は一つだけだった。「東京駅丸の内駅舎の保存・復原」である。アンケートに答えた著名人の一人、五十嵐太郎氏は、その結果に違和感を持ったという話す。「唯一、平成を代表する東京の建築として選ばれたのが東京駅の復原工事でした。駅舎を大正時代の姿に戻すプロジェクトです。確かに意義のある仕事ではありませんが、他に特筆すべき新しい建築はなかったのかと。一方、地方は健闘していました。地方建築の時代と言っても良いかもしれませんが、逆説的には東京の建築が持っていた構想力、創造力が萎んでしまったとも捉えられます。アンケートが『昭和を象徴する建築物』という問いかけだとしたら、半分以上は東京の建築物が列挙されたはずでしょう」と言う。「東京」に限らず、日本の建築が明治維新、そして昭和の高度成長期に有していた創造力というエネルギー

を今一度取り戻すことができれば、令和の建設業界は更に躍動するはずだ。そのヒントを五十嵐氏とともに探っていく。

リアルな都市景観で未来を提示した『AKIRA』

一九八二年に「週刊ヤングマガジン」で連載を開始した漫画『AKIRA』。国産SFの金字塔とも言える作品だ。舞台は二〇一九年の東京。二八年前に日本で新型爆弾が使用され、これを機に第二次世界大戦が勃発、世界は荒廃する。終戦後、東京湾を埋め立てて造成されたメガロポリス「ネオ東京」に高層ビルが林立、二〇二〇年には東京オリンピックの開催も決まり、新スタジアムの建設が進む。旧市街を疾走する暴走族が、奇妙な超能力を持つ小男と遭遇したことから、暴走族リーダーの金田、超能力に目覚めたメンバーの鉄雄、更に反政府ゲリラや軍が入り乱れ、日本を荒廃に導いた絶対的な超能力少年「アキラ」の実態に迫っていく。

作者は漫画家の大友克洋氏。連載は中断を挟むが約八年に及び、

に破壊されたコンクリート壁の絵には現実感があります」と五十嵐氏は説明する。ビル群が一挙に倒壊する場面は俯瞰から描かれる。そのリアリティは大友氏の想像力と卓越した画力がもたらしたものだ。

東京湾に展開した圧倒的な想像力

『AKIRA』の冒頭では、東京湾を埋め立てて生まれた新首都「ネオ東京」の俯瞰が示される。現在の東京湾アクアラインから北側の湾内を

アニメーションでの映画化もされて世界的に大きな評価を得た。大友氏による繊細かつ精緻を極める独特の線で描かれた人物、都市の風景、建造物は唯一無二。圧倒的な世界観を描写する表現力はアートの分野にも多大な影響を及ぼし続けている。物語の舞台が二〇一九年で、二〇二〇年の東京オリンピックを予言するかのような設定であることから、近

年メディアで改めて取り上げられることも多い。新アニメプロジェクトも進行中だという。渋谷PARCOの建て替え工事現場では、その仮囲いに気鋭のアーティストとコラボレーションした作品が描かれて話題となった。「日本の漫画史においてこれほど精密に表現された建築、都市景観はかつてありませんでした。その精密さは驚異的で、記号に近い扱いで描かれて

いたそれまでの漫画の建築物とは一線を画す革命的なものでした」と五十嵐氏は話す。しかし、ネオ東京に群立するのは我々がよく知っている無数の高層ビルだ。奇をてらった建物のフォルムからは距離を置き、徹底的にリアルを追求した都市の光景が提示される。「都市景観として斬新なイメージを構築するのではなく、ニューヨークの摩天楼



上 / 『AKIRA』第1巻 P8-9より、物語の冒頭を飾る「ネオ東京」の俯瞰。第三次世界大戦後、2019年の東京湾の姿だ。(©大友克洋 / マッシュルーム / 講談社)

右上 / 建築家、丹下健三氏は1961年に「東京計画1960」を発表。東京の都市構造を大胆に改革する提案として建設業界だけではなく、社会全体に大きなインパクトを与えた。

右下 / 後に千葉県知事に就任する加納久朗氏は、房総半島の山を核爆弾で粉砕し、その土砂で東京湾を埋め立てる構想を発表した。その背景には核の平和利用という思想もあったという。



「東京計画1960」丹下健三 (写真撮影・提供:川澄明男)



産業計画会議「ネオ・トウキョウ・プラン」
(第7次レコメンデーション「東京湾2億坪埋立についての勧告」/ 資料提供: (一財)電力中央研究所)

埋め立て、そこに巨大な人工島が造成されている。一九六二年に建築家・丹下健三氏が発表した「東京計画1960」を彷彿とさせる。都心から千葉の木更津方向に線形平行射状に延びる三層の高速道路を走らせ、その周辺に官庁やオフィス街、居住地区からなる海上都市を構築しようとするものだった。求心型、放射状構造として成立した東京の交通システムの限界を指摘し、線型平行射状の新たな都市軸を提案している。

時代を背景に、浸潤するように広がっていった人工島の比較は興味深い。東京湾を都市化する構想はほかにもある。一九五〇年代には、東京・晴海と千葉・富津岬を結ぶ線を引き、その東側、つまり千葉県側をすべて埋め立てるといった構想が発表された。日本住宅公団(現 都市再生機構)の初代総裁・加納久朗氏が打ち出した「東京湾埋立てによる新東京建設提案」である。埋立資材の調達方法が、房総半島の鋸山や房総山を核爆弾で粉砕し、その土砂を活用するという



©YOICHI TSUKIOKA/SEBUN PHOTO / amanaimages

圧倒的筆力で表現された創造都市



『AKIRA』第3巻 P262-263より(©大友克洋 / マッシュルーム / 講談社)



フィンランドの首都・ヘルシンキに計画された美術館の分館建設をテーマに開催されたコンペティションに出品された作品。デジタル技術により、過去に存在したあらゆる形態を利用して、新たな世界観を創造することに挑んだ。実現はしなかったが、このプラン自体がアート作品に見える。マーク・フォスター・ゲージ(ヘルシンキ・グッゲンハイム美術館)コンピューター・グラフィックス、2014年、Image courtesy of Mark Foster Gage Architects



映画「ブレードランナー」より
巨大スクリーンが夜空を染めるJR渋谷駅前(写真提供:PIXTA)

UNBUILD ARCHITECTURE

約四〇名の建築家、アーティストが提示したアンビルドII未完の建築。土木構造物はどれも刺激的で、観る者の意識を静かに震わせる。「建てられなかった」という形容は不可能を意味する言葉ではない。技術的には可能であっても社会的な条件や

今年二月、埼玉県立近代美術館でユニークな企画展が開催された。二十世紀以降の「建てられなかった建築」を集めた「インポッシブル・アーキテクチャー もうひとつの建築史」展である。

制約によって実現に至らなかった建築、自らの批評家精神を表出するためにあえて「提案」に終わらせた設計など、どの作品にも作者の想像力や思考がカタチとして直接的に表現されている。同展は来年三月まで広島・大阪を巡回する。

監督者としてこの展覧会を主導した五十嵐氏は開催の背景についてこう語る。「バブルの崩壊から二度の大震災を経て、日本の建築が停滞していった。現在の建築界に向けて大胆な構想力を持って設計することの重要性を訴えたかったんです」。

バブル期の日本の建築界には、意匠や装飾に重心を置いたポストモダン

アンビルド アーキテクチャー に学ぶ

建てられることなかった建築や土木構造物。その背景にある不可能と可能の境界を越える。

大胆なものだった。その案を基に、電力中央研究所の創設者・松永安左エ門が委員長を務め、多数の有識者を集めて開催した「産業計画会議」が、一九五九年八月に「東京湾2億坪埋立についての勧告」として「ネオトウキョウ・プラン」を公表した。加納氏は後に千葉県知事に就任するが、一〇日後に死去。そのポリシーは後進に引き継がれ、奇しくも京葉工業地帯や浦安エリアのベッドタウンを形成することになる。

五十嵐氏は当時の時代背景を踏まえてこう解説する。「丹下氏の『東京計画1960』の担当メンバーとして働いていた建築家の黒川紀章氏もその後、都心から東京湾上に伸展し、五〇〇万人が暮らす、高さ二三八メートルの螺旋状メガストラクチャーを発表しています。当時は東京の爆発的な人口増加という切実な問題があつて、建築家は皆、その課題に真剣に取り組んでいました。海に出ていく、高層化するといった発想も、規制が撤廃されることを想定して提案されました」。その根底にあつたのは規制や常識に捉われない建築家の類まれなる想像力と鋭利な感性だ。

現在の建設業界も担い手の確保、就業者の高齢化、生産性の向上といった課題に対峙している。業界が秘める技術的なポテンシャルと、そうした想像力や感性があれば、課題を開する道筋が見えてくるはずだ。

今年NHKで放送された東京の再開発を追うドキュメンタリー「東京リボン」のタイトル映像に『AKIRA』の新作アニメーションが採用された。作者の大友氏はその際に次のような主旨のコメントを寄せている。「『AKIRA』の世界観は『昭和の自分の記録』。戦争から敗戦、オリンピックや万博があつた。僕にとつて東京は昭和のイメージがものすごく大きい。東京は常に変化しています。東京は生き物だから。人々の生き方やスタイルも変わっていくでしょう。新しい東京は新しい人たちが創っていくべきだと思います。昭和の残滓を全部切り捨てて新しいものをつくり上げる。東京はいつもそんな風でなきゃいけないんです」。五十嵐氏もこう語る。「逆に、想像力によって描かれ



ブレードランナー
ファイナル・カット

日本語吹替音声
追加収録版
ブルーレイ
(3枚組)
¥5,990+税
ワナー・
ブラザーズ
ホームエンター
テイメント

TM & ©2017 The Blade Runner
Partnership. All Rights Reserved.

たものが現実にはフィードバックされるということもあります。SF映画『ブレードランナー』(一九八二年公開)に登場する巨大スクリーンがビルの壁面に設置された未来都市は、現在の渋谷駅前の光景に酷似している。フィクションが現実に近い感じはしませんか? 漫画や映画など、その時々にした表現が、深層のレベルで未来を創造する力に影響を与えていると言えるでしょう」。

昭和の原風景から創造された『AKIRA』の世界観。それが更に時を経た現実の未来都市、建造物を想像・創造する原点になる可能性もある。想像力と創造力がパラレルな関係性を保ちながら新しい造形の地平を切り拓いていく。



埼玉県立近代美術館で開催された「インポッシブル・アーキテクチャー もうひとつの建築史」のパンフレット。同展は新潟市美術館でもすでに開催され、本年9～12月に広島市現代美術館、2020年1～3月には大阪の国立国際美術館を巡回予定だ。(詳細は各美術館にお問い合わせください)

可能性がギリギリのところ、あう視点で提案された作品がインポッシブル・アーキテクチャーなんです」と五十嵐氏は語りながら、その意味を端的に表すエピソードを明かしてくれた。

同展の目玉でもある、建築家のザハ・ハジド設計による新国立競技場プロジェクトの白紙撤回は、この展覧会を開催に向けて動かしたトピックスの一つだ。なぜハジド氏のスタジアム建設を実現できなかったのか。日本の建築界に対する問題提起として展覧会場の動線の最後に特設

コーナーを設けた。風洞実験模型や、何冊もの分厚い実施設計書が並ぶ。莫大な建設予算が問題となり姿を消したプロジェクトだが、それが着工というスタートラインに立っていたことは確かだろう。改めてUFOの母船のようなそのフォルムに目を見張った。「日本で一番有名なアンビルド建築ですが、この展覧会の開催直前になって、設計J・Vとハジド氏の事務所サイドから展示を躊躇する旨が伝えられました。理由は『インポッシブル・アーキテクチャー』というタイトル。『不可能』と冠された



世界で最も高いエッフェル塔をしのぐ400mの塔として1920年に構想された。鉄製の二重らせん構造の内部は4つの建造物からなり、それぞれが時間差で回転するという。計画を再現したCGからは幽玄なイメージが伝わってくる。
映像制作・監督：長倉威彦、コンピューター・グラフィックス：アンドレ・ザルジッキ／長倉威彦／ダン・ブリック／マーク・シッチ
《ウラジーミル・タトリン「第三インターナショナル記念塔」(1919-20年)》 コンピューター・グラフィックス 1998年

た。今海外に目を向けると当時の日本と同様の現象が起きていると五十嵐氏は話す。「今、日本を代表する建築家が海外で勇躍していきま

しかしバブルの崩壊とともにポストモダンや脱構築主義をイメージさせる脱構築主義の建築もそのデザインが不謹慎だと指摘される風潮があった。「バブル崩壊と二つの大震災以降、建築界が保守化してしまった印象があります。実験的あるいは挑戦的な建築が衰退してしまっただけです。ポストモダンや脱構築主義も、当時としては先端的なことに挑んでいて、現在でも評価される側面を多分に持っていると思うんです。『インポッシブル・アーキテクチャー展』は本来建築が見直そうとするイベントです」と五十嵐氏は説明する。当時のトレンドが現在の建設業界に与えた影響、あるいは反証として提案された多様な価値観もあるはずだ。

「正面から不可能な建築として捉えるのではなく、実現の不可能性と

同展における建築のインポッシブル(不可能)とポッシブル(可能)の境界はある意味曖昧だ。資金と時間をかければ可能であったはずの不可能もある。圧倒的なインパクトをもって見るものを刺激する建築も、図面を基に模型を作ろうとすると合理性に欠けるといったこともあった。「不可能な建築として捉えるのではなく、実現の不可能性と

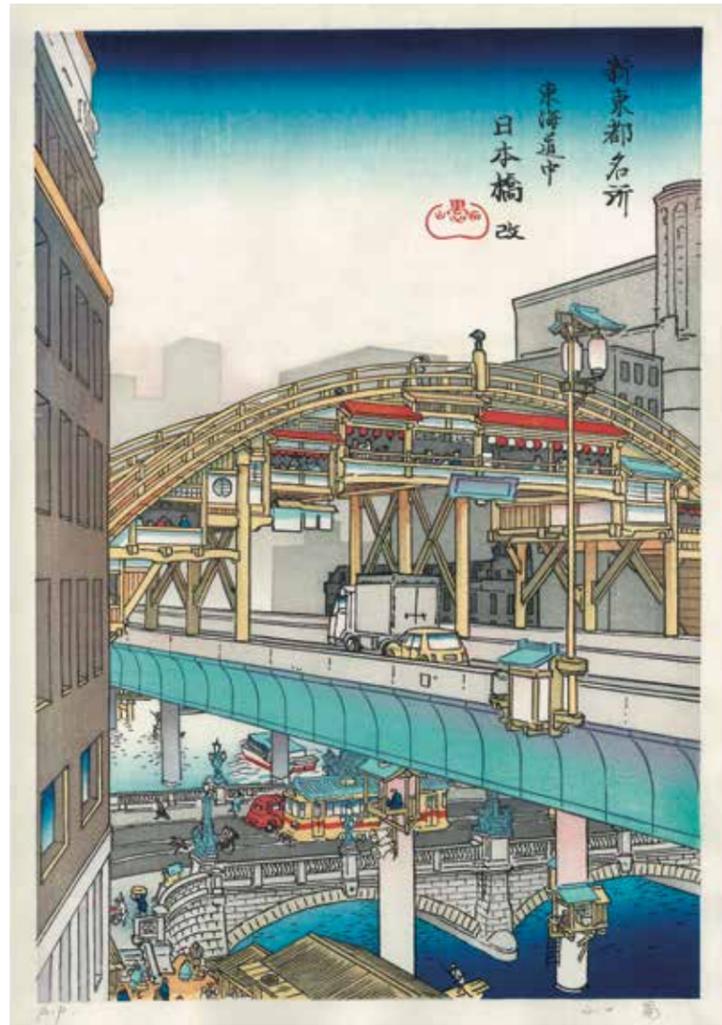
不可能と可能の境界線から見えてくるもの

特に東京で活躍する場と機会が少なくない。彼らの代表作となる建築が国内になくなるかもしれない。日本人が建築界のノーベル賞と言われるプリツカー賞を次々と受賞する今こそ、日本建築界のピークと言えます。そのポテンシャルを掘り起こさないでどうするのかと切実に思うんです」。

U N B U I L D A R C H I T E C T U R E



1930年代、ソ連ではスターリン政権によって建築を含めた表現活動が制限された。この時代を生きた建築家は、自らの手による1万7千ものドローイングから101点を厳選し「建築ファンタジー」としてまとめた。どの作品にも縦横無尽に発揮された建設的構想力が横溢している。
ヤーコフ・チェルニホフ 『建築ファンタジー 101のカラー・コンポジション 101の建築小図』より 書籍 1933年 個人蔵



東京・日本橋をまたぐ首都高速道路を地下化する構想が本格的に始まっている。景観論争の一つの答えとしてアーティストは現在の高速道路をまたぐ新しい日本橋の絵を描いた。一見冗談のような発想が忘れられていた可能性の扉を開く。

山口晃 新東都名所 東海道中「日本橋改」2012 木版画(手摺り) 39.2×26.9
制作: アダチ版画研究所 ミヅマアートギャラリー蔵 ©YAMAGUCHI Akira/Courtesy of Mizuma Art Gallery



セルビアの首都・ベオグラードの複合施設として提示された「浮遊する雲」のイメージは、CGというテクノロジーによってその世界観を直接的に表現することに成功している。

藤本社介 《ベトンハラ・ウォーターフロント・センター》 コンピューター・グラフィックス 2012年

UNBUILT ARCHITECTURE

提案もたくさんあるけれど、それ以上に好き勝手なことを発言できるという自由さがとてもいいと感じました。ノートルダムに限らず日本の若い建築家も『自分だったら』という立ち位置からどんな斬新な発想を『勝手に』発信してほしいですね」。それは日本の建築を、ひいては

日本という国や社会そのものを変えていくことにつながると五十嵐氏は話す。

丹下氏や黒川氏の東京湾の再開発構想も自発的な提案だった。それを伝えるメディアは当時、新聞や雑誌といった限られたものだったが、デジタルネイティブの今の担い手

たちは、すでにインターネットという強力な道具を手に入れている。想像力を解き放ち、自由に発言、発信できる環境は整っている。

「『建設』を生業としている人が、視覚ジャンルのにも近いアートやサブカルチャーに触れることはとても意義のあることだと思います。建築、

土木といった限られたフレームのなかだけで発想するのではなく、刺激を受け続けながら新たな地平を拓いてほしいと期待しています。そして現在、日本の建設業界は、そうした構想を実現できるだけの技術力を持つています」。五十嵐氏は最後に、そうエールを送ってくれた。



漫画『AKIRA』の第1巻を時に眺めながら、インタビューに応じてくれた五十嵐太郎氏。

「一方で展示を撤回した作品もある。一九五五年に建築家・白井晟一氏が発表した幻の建築「原爆堂」展覧会に出展することで、ほら、やっぱり無理だったんじゃないかということになりかねない。『アンビルド』だったら再考の余地はあるということですが、さすがに展覧会名を変えることはできません。それで、最後にこのチラシを提示しました。『インポッシブル』に抹消線が引かれている。我々が考えるインポッシブルは実現不可能と同義ではないと、グラフィカルに表現することでご納得いただけました」。

「勝手に」提案する！

「当然のことながら、同展に足を運んだのは建設業界に身を置く者ばかりではない。埼玉県立近代美術館では予想以上に一般の来場者が多かった。東京オリンピック・パラリンピックの開催直前というこのタイミングで、ハデイド氏のプロジェクトが大きく取り上げられたこともあり、異例の盛況を見せた。五十嵐氏は「マニアックな催しなので開催前はさほど話題にならなかったんですが、SFファンや漫画、サブカルチャーに興味を持つ一般の人たちが数多く観に来てくれました」と明かす。「建築」や「土木」が市民権を得ている証左

は、実現可能性が顕著になってきたことから、直前になって展示が見送られた。

インポッシブルは確実にポッシブルを内包している。五十嵐氏は「映画『ミッション・インポッシブル』も最終的にはすべてポッシブルになっています。想像する力があれば実現可能な建築があるんです」と笑った。

「それでもやはり、この展覧会には建設業界に向けたメッセージが横溢している。五十嵐氏に業界人、特に次世代を担う若手に伝えたいことを聞いた。「建築の発展に積極的に関与してほしいということ。建築の歴史に新しい一ページを書き加えてほしいと。クライアントのマインドを変えていくことも必要ですが、建築サイドも頑張らなければ。どうせ仕事にならない、安ければいい、といったことを第一義に考えていたら、日本の建築は本当にただの箱モノばかりになってしまいます」。

「そのためには「勝手に」提案する気概が欲しいと、五十嵐氏はこう続ける。「頼まれなくても考えて発表すればいい。東京スカイツリーが竣工した時、あるアーティストが『僕だったらこんなタワーを造る』とスケッチを見せてくれたんです。実現できるかどうかはともかく、その人の作風を反映した、とてもユニークなものでした。最近火災に遭ったフランス・ノートルダム大聖堂の再建についても、世界中から続々とアイデアが提案されています。どうしようもない



フランスのエピナル市を流れるモーゼル河に架ける橋として構想されたが、実現には至っていない。この橋を渡ろうとする者は、体をひねったり屈みながら渡河することになる。土木構造物を超えて、もはや哲学を立体化したこのような橋梁。13mに及ぶ巨大な模型が放つ異様な存在感は、対峙する者の感性を強く刺激する。

荒川修作+マドリン・ギンズ | 《問われているプロセス/天命反転の橋》 | 模型 | 1973-89年 | ©2019 Estate of Madeline Gins. Reproduced with permission of the Estate of Madeline Gins. (撮影:埼玉県立近代美術館)